

県立博物館

総合調査報告書Ⅷ

—古宇利島(こうりじま)—

津波古 聰：古宇利島眺望…………… 1

上 門 清 春：古宇利島の倍脚類と陸産貝類について…………… 7

千木良 芳 範：古宇利島のクモ類について…………… 15

大 城 學：古宇利島の祭場と儀礼…………… 25

1991

沖縄県立博物館

ごあいさつ

沖縄県立博物館の総合調査は、県内の特定の地域に焦点をあて、その地域の自然、考古、歴史、美術工芸、民俗等について調査し、その成果を学術報告としてまとめたものです。昭和54年度の粟国島を皮切りに始められた本調査も、渡名喜島、座間味島、伊計島、瀬底島、与那国島、浜比嘉島と回を重ね、今回で8回目となりました。

今年度の総合調査は、今帰仁村の古宇利島で実施しました。古宇利島は本部半島の北、約1.5kmの海上に浮かぶ円形の島です。遠望すれば見事な段丘が見られ、地史的にもおもしろい島です。また沖縄版アダムとイブの説話が伝えられる島でもあります。

本報告では古宇利島の自然と民俗について、当館の職員がそれぞれのテーマに基づいて調査した結果を収録しました。古宇利島を理解する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の総合調査を実施するにあたって、今帰仁村教育委員会をはじめ、古宇利島のみなさまから多大の援助を頂きました。ここに記して、心からの謝意を表します。

平成3年3月

沖縄県立博物館

館長 大城宗清

古宇利島眺望

古宇利島の撮影は1991年1月11日と2月8日の両日におこなった。第一日目の1月11日は雨天のため、本村周辺にしづくり、傾斜に立地する集落の姿を中心に撮影をした。2月8日は、好天にめぐまれたため、古宇利港のある本村をスタートして上原の集落へ、さらに東回りに下原をまわり、帰りは下原から本村まで縦断する順路で撮影をした。島を縦断すると、「丸い盆を伏せたような島」の様子がよくわかる。(撮影・文:津波古聰)



① 古宇利島、本村の全景。カマボコ屋根は小中学校の体育館。



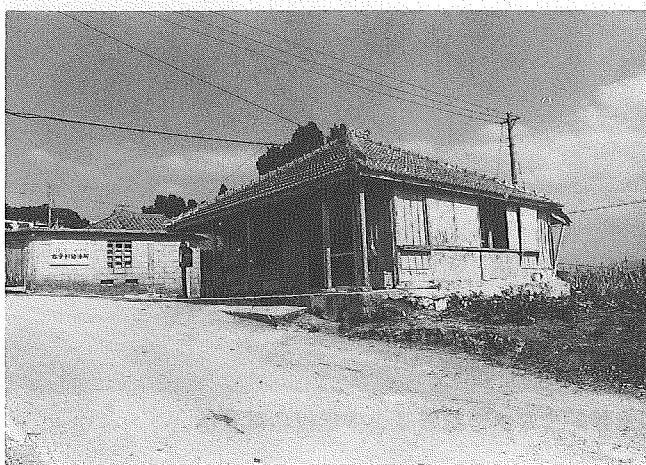
② 古宇利港



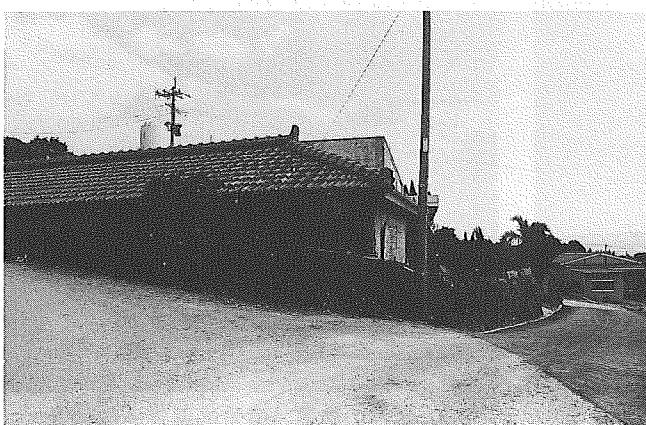
③ 本村の集落。遠景は屋我地島付近。



④ 本村の集落景色。



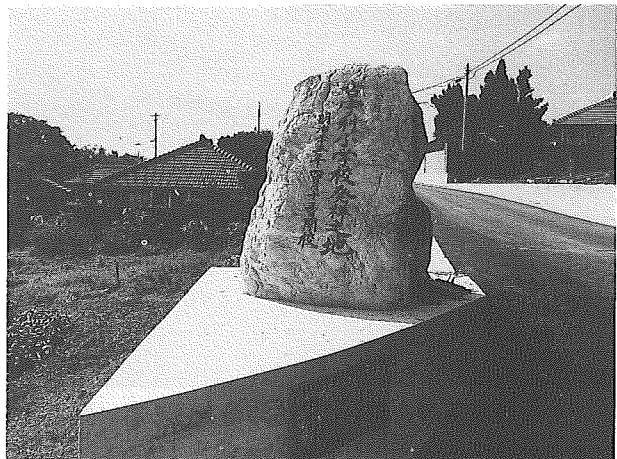
⑤ 本村の集落。神アシャゲ近くの
売店。



⑥ 本村の集落内には、細長い畜舎
跡が数ヶ所残っている。



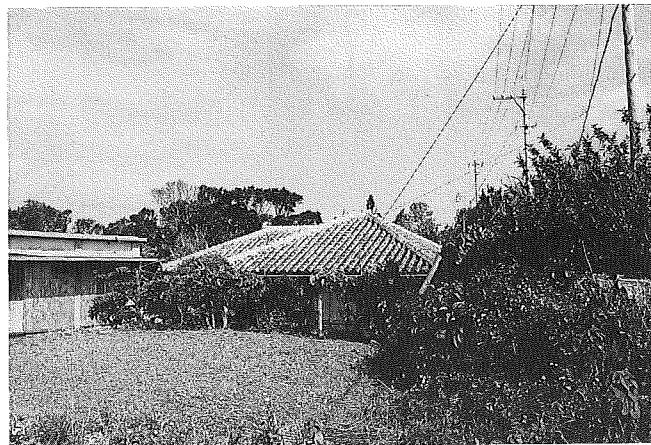
⑦ 本村の家屋敷は、傾斜地を削り、建てられているため、一方の屋根は道路面に水平になっている。



⑧ 「古宇利小学校発祥の地」の石碑。
明治23年4月、古宇利簡易小学校
に始まり、同26年5月、簡易小学
校は廃止され、天底尋常小学校の
分校になるが、同年12月、古宇利
尋常小学校として独立した。
(今帰仁村史より)



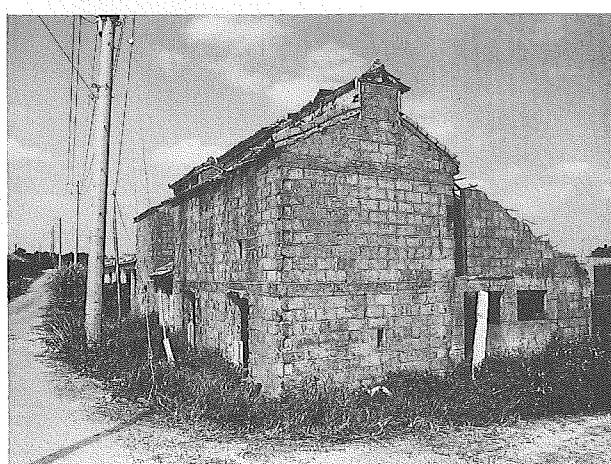
⑨ 現在の古宇利小中学校。



⑩ 上原の集落内景色。



⑪ 上原集落の遠景。左の方に島で最も高い所があり、その昔、トューミヤーと呼ばれた灯台があったと言われている。



⑫ 上原の集落にあった煙草葉を乾燥させた建物。現在は廃屋で、同様な建物はこれ以外見つけることができなかった。古宇利島には、1966年ころまでは、8棟の乾燥室があったようである。

(今帰仁村史より)



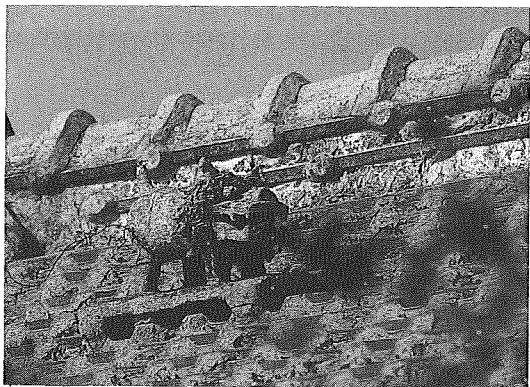
⑬ 下原の集落。島の北側に位置し、ここから北の方を見ると伊是名島がかすかに見える。



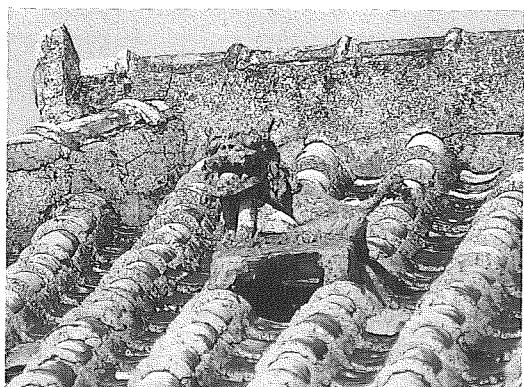
⑭ 下原の集落。



⑮ 島の北側。道路の向こうが下原の集落。



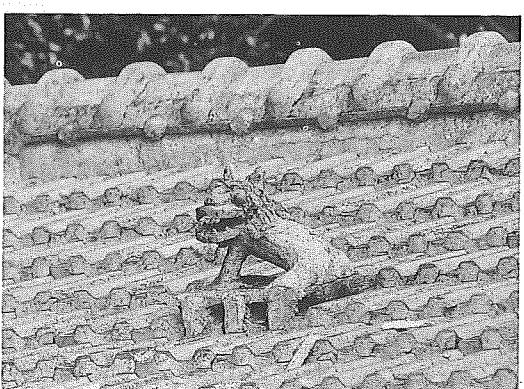
⑯ 本村集落内の屋根獅子



⑰ 本村集落内の屋根獅子



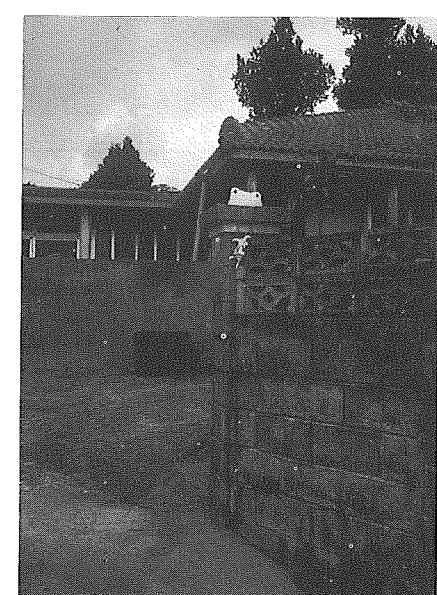
⑱ ピニールパイプと竹を組み合わせた目隠し垣。



⑲ 上原集落内の屋根獅子



⑳ 本村集落内のシャコガイの
「ムンヌキムン」



㉑ 本村集落内のスイジガイの
「ムンヌキムン」

古宇利島の倍脚類と陸産貝類について

上門清春

(沖縄県立博物館)

Diplopoda and Land Shells of Kouri-Jima, the Okinawa Islands

Seisyun UEJYOU

(Okinawa Prefctural Museum)

I. はじめに

1990年度沖縄県立博物館の総合調査は今帰仁村古宇利島で行われた。

筆者は、古宇利島の倍脚類（ヤスデ）と陸産貝類（カタツムリ）のファウナを明らかにするための採集調査を行ったのでその概要を報告する。

II. 調査地の概要

古宇利島は、本部半島の北方約1.5kmに位置し、面積2.95km²、周囲7.88km、最高標高107.4m、主に第四紀の琉球石灰岩からなり、海岸段丘が発達する台地状の島である。（図1）

今回実施した調査地点は、ポイント1～5の5ヶ所である。以下にその概要を記す。

ポイント1は海岸沿いで、モクマオウ、アダン、シマグアなどの混成する小規模なヤブである。リターのほとんどがモクマオウの葉で、分解の度合も悪く、A₀層も極



図1. 古宇利島の遠景

端に薄い砂質地である。

ポイント2はサトウキビ畑の周囲で、サトウキビの下葉や除草した下草などの積んであるところである。（図2）

ポイント3と4は、第四紀の琉球石灰岩断層崖と段丘面の接するところに発達する石灰岩植生である。ポイント3はリュウキュウマツが優占するリュウキュウマツ群落であり（図3）、ポイント4はナガミボチヨウジ、クスノハカエデが優占するナガミボチヨウジークスノハカエデ群落である。いずれもリターは薄く表土も固く乾燥している状態であった。林床のあちこちに石灰岩

が露出し表土も薄い森林である。ポイント5は古宇利部落内である（図5）。



図2. ポイント2での積草の様子



図3. ポイント3の林の景観

III. 調査方法

調査は、1991年1月10日～11日の2日間にわたって行った。

ポイント1・3・4では、半径約20mの円内を自安に、歩きながら樹幹上、葉上、石灰岩岩壁などで採集を行った。倒木など朽ち木は、ぼろぼろに細かく崩しながら採集した。また、林床下にいるヤスデなどの土壤動物の採集は前記円内で腰を下ろし右手を半径にした円内で、リター層、Ao層

(-5cmまでの範囲)でハンドソーテングした。調査終了後は、リターおよび土壤はもとに戻した。ポイント2では、積んである草の中や下で採集を行った。ポイント5は、部落内を散策しながら目につくヤスデやカタツムリなど採集した。なお、各ポイントでの調査は、1時間～2時間以内であった。

ポイント4では夜間採集も行った。これらの調査地点を図6に示す。

ヤスデ類は、液浸標本(80%アルコール)にし、カタツムリ類は博物館に持ち帰り熱湯で処理して生体を抜き取り、殻の標本を作成してから同定した。



図4. ポイント4の林の景観



図5. 古宇利部落の様子

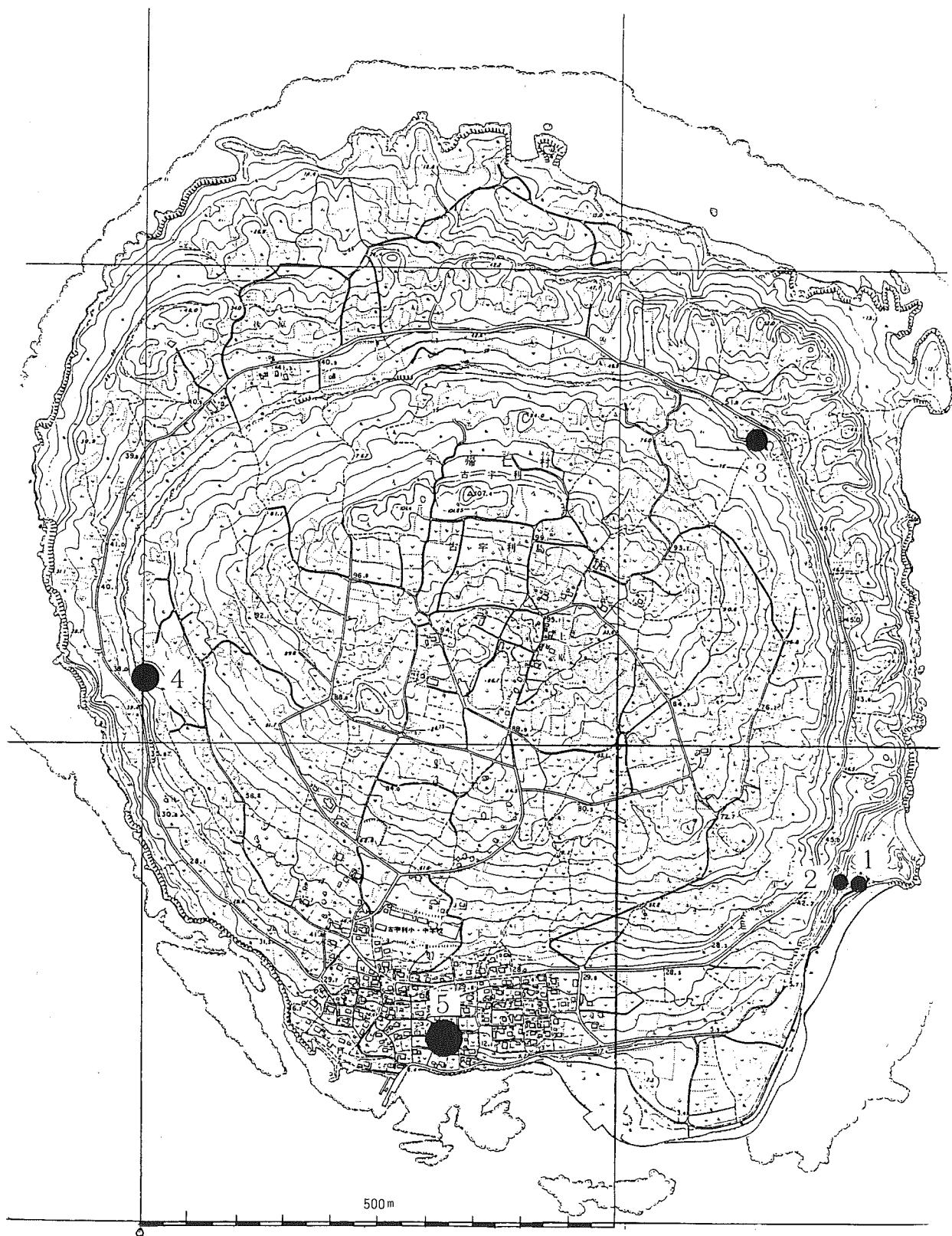


図6. 古宇利島における5カ所の調査ポイントの位置。

IV. 調査結果

1. 倍脚類（ヤスデのなかま）について

今回の調査で確認されたヤスデは下記のとおり3目3科3属3種であった。

1) タマヤスデ目 Oniscommorpha

1. タマヤスデ科 Gromeridae

1. タマヤスデ属 *Hyleoglomeris* VERHOEFF

①オキナワタマヤスデ

Hyleoglomeris yamashinai VERHOEFF

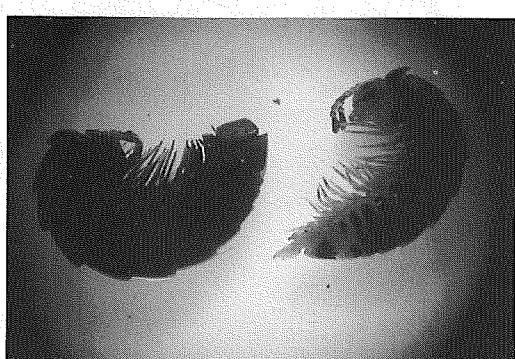


図7. オキナワタマヤスデの雌雄

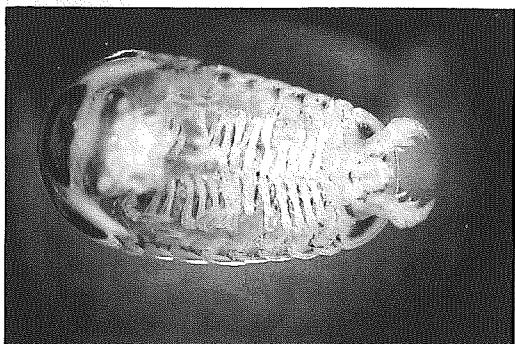


図8. 雄の生殖肢後端部・後雄類

胴は14~16節からなる。背板の数は11~13。雌は17または21対肢、雄は19または23対肢で、そのうち図8のように最後の対が端

生殖肢になっている。このことから、後雄類 (Opisthandria) という。ダンゴムシのようにさわると完全に球形に巻いてしまうのでよく間違えられる。

採集個体：16個体（♂11、♀5）

今回採集した16個体は、すべてポイント4のアダンの倒木から採集した。アダンは表面は原形を留めているが、中身の繊維はほとんど朽ちていて、その繊維をほぐしながら採集した。

2) オビヤスデ目 Polydesmoidea

2. ヤケヤスデ科 Strongylosomidae

2. ツツヤスデ属 *Kronopolites* ATTEMPS

②ツツヤスデの一一種

Kronopolites sp.

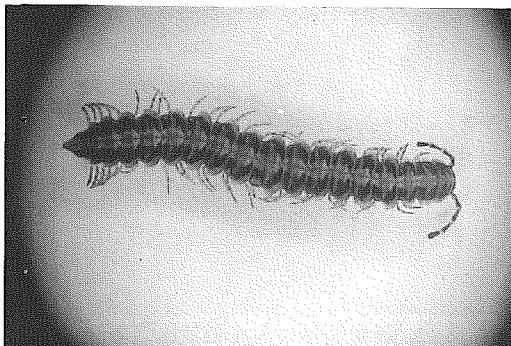


図9. ツツヤスデの全形

採集個体：20個体（♂1、♀19）

20個体のうち18個体は、ポイント3・4のリター層、Ao層、倒木朽ち木の樹皮下から採集した。残り2個体は、夜間採集時にイヌビワの幼木（樹高：約40cm）の葉上から採集した。

ヤスデの中には樹上に登る種もいるが、本種が葉上にいたのはおそらく、ヤスデの

成体一般によくみられるクライミングという行動であろう。

なお、本種は新記録種の可能性もある。今後検討し明らかにしたい。

3) ヒメヤスデ目 *Juliflormia*

3. ヒメヤスデ科 *Julidae*

3. フジヤスデ属 *Fusiulus* ATTEMPS

③ ヤマシナフジヤスデ

Fusiulus yamashinai VERHOEFF



図10. ヤマシナフジヤスデの全形

採集個体：29個体（♂10、♀19）

本種は全個体ポイント1のリター層、A_o層（ほとんど砂質）で採集した。

琉球産ヤスデは15科25属36種が記録されている（大嶺、1962）が、今後まだまだ新記録種が増えそうである。なぜなら、近年観葉植物などの移入増加に伴い、ヤスデも北（温帯）や南（熱帯）からの侵入が増加する傾向にあるからである。

現在ヤンバルトサカヤスデ（県調査によれば1989年12月現在22市町村で異常発生し、1991年現在なおその生息域を広げつある）

やオキナワフジヤスデ（1990年11月大里村

新興住宅地グリーンタウンや平良、福原区一帯で異常発生が報告されている。新種記録：篠原、1990）の異常発生が新聞を賑わしている。

その中で、ヤンバルトサカヤスデは台湾の花蓮から入って来たもので1983年に沖縄で初めて記録された。そのきっかけも本種の異常発生であった。1983年の秋、沖縄本島中部の北中城村屋宜原で異常発生し沖縄での初記録となったのである。その後7年余で異常発生しながら沖縄本島全域に生息域を広げつつある。

ヤスデは、海を渡る能力や機会は自然状態では比較的少ない。いったいどういう経路でヤンバルトサカヤスデが台湾の花蓮から沖縄本島、屋宜原に侵入したのだろうか。その因果関係を説明するために、ヤスデの一節を紹介する（篠原、1979）。

「先生、このヤスデは何という種類でしょうか」といって、一匹の生きているヤスデを、一人の生徒が持ってきた。調べてみるとなんと関東地方にはいないはずのネジアシヤスデであった。ネジアシヤスデは、奄美大島以南に分布する種類で、どうして東京下町墨田区にいたのだろうか。聞いてみると、二、三日前に花屋から買ってきた鉢植えのプリムラの葉にいたものだという。

このことから考えると、沖縄あたりからの花か植物についてきて、輸送のどこかの時点でプリムラに移ってしまったものと思われる。

この一節からしてヤンバルトサカヤスデ

も、台湾からの木材や植物にくつついで侵入したものだと思われる。屋宜原の国道330号線沿の路肩に植栽されているヤシ類などは台湾から移入したもので、本種もそれと共に侵入したものではなかろうか。

近年、人為的に植物、野菜、果物、木材などの輸送が、世界的に大量にしかも頻繁に行われている。植物病害虫のみならず、このような土壌動物さえも伝ばんの機会が多くなっている。ヤンバルトサカヤスデなどの異常発生が、土壌生態系にどのような影響をあたえるか皆目見当もつかない。沖縄のヤスデ相に、大きな影響を与えているものと考えられる。そのような見地からも各地のヤスデ相の実態調査は急務である。

ヤスデは土壌形成者として、一生を土の中で生活する有益な土壌動物である。時に種によっては異常発生し、人家に侵入して人間に不快感を与えたりするので嫌われるものになる。そのため人間はその駆除にやっきになるものである。

今回は調査期間も短く、データも少ないので古宇利島のヤスデ相を論することは早々である。今後調査を積み重ねてから明らかにしたい。現在のところヤンバルトサカヤスデの古宇利島への移入は認められないで、本島からの観葉植物などの持ち込みに留意したいものである。

2. 陸産貝類について

今回採集された陸産貝類は4科6属8種である。以下、採集品の報告のみに留め、

それぞれの種についてPLATEで紹介する。

1) キセルガイ科 *Clausiliidae*

1. ニセノミギセル属 *Parazaptys* PILSBRY, 1905

① ニセノミギセル

Parazaptys thaumatopoma (PILSBRY, 1905)

※ポイント4 倒木朽木樹皮下。

2) カサマイマイ科 *Trochomorphidae*

2. カサマイマイ属 *Videnoida* HABE, 1955

② オオカサマイマイ

Videnoida horiomphala (PFEIFFER, 1985)

※ポイント4 倒木の樹皮下。

3) ナンバンマイマイ科 *Camaenidae*

3. ニッポンマイマイ属 *Satsuma* A. ADAMS, 1868

③ イエジママイマイ

Satsuma (Satsuna) mercatoria iejimana

(PILSBRY & HIRASE, 1905)

※ポイント2 の積み草の下。

④ オキナワヤマタカマイマイ

Satsuma (Luchhadra) largillierti

(PFEIFFER, 1849)

⑤ クマドリヤマタカマイマイ

Satsuma (Luchuhadra) adelinae (Pilsbry, 1901)

※④、⑤ともポイント3・4の葉上
石灰岩壁面。

4) オナジマイマイ科 *Bradybaenidae*

4. オオベソマイマイ属 *Aegista* ALBERS, 1850

⑥ イトマンケマイマイ

Aegista (Plectotropis) scepsasma (REEVE, 1854)

※ポイント4 の倒木朽ち木の樹皮下

5. オナジマイマイ属 *Bradybaena* BECK, 1837

⑦ パンダナマイマイ

Bradybaena circulus circulus (PFEIFFER, 1846)

6. ウスカワマイマイ属 *Acusta* ALBERS, 1860

(8) オキナワウスカワマイマイ

Acusta despecta despecta (SOWERBY, 1839)

※採集ポイント 5

V おわりに

本稿をまとめるにあたり陸産貝類の同定をして頂いた泊高校の知念盛俊教諭、ヤスデの同定ならびに貴重な論文、御指導を頂いた県公害衛生研究所の比嘉ヨシ子主任研究員に感謝の意を表する。

VI 引用文献

大嶺哲雄, 1962. 沖縄産倍脚類目録

沖縄産倍足類とその分布について,

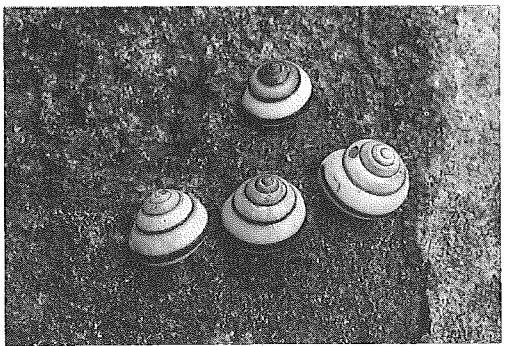
沖大論業. 1-15

篠原圭三郎, 1979. ヤスデの話し、環境衛生26(5), 16-20

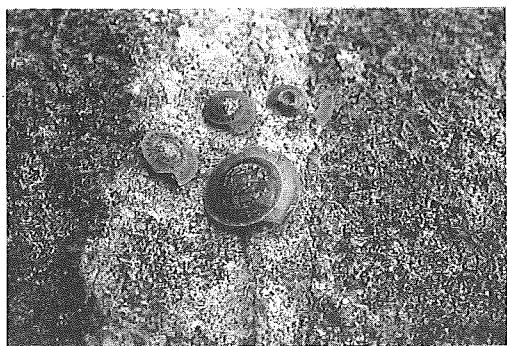
篠原圭三郎, 1990. Three New Species of the Genus *Anaulaciulus* (Diplopoda: Julidae) from Japan EDAPHOLOGIA, NO.42:21-25



① ニセノミギセル



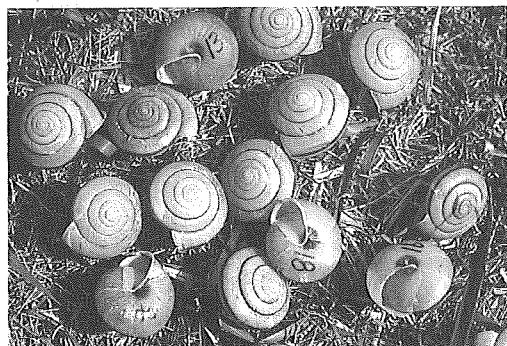
⑤ クマドリマイマイ



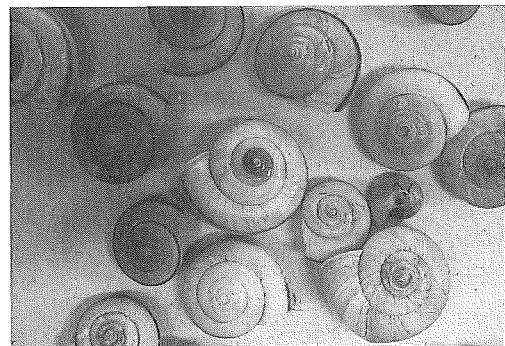
② オオカサマイマイ



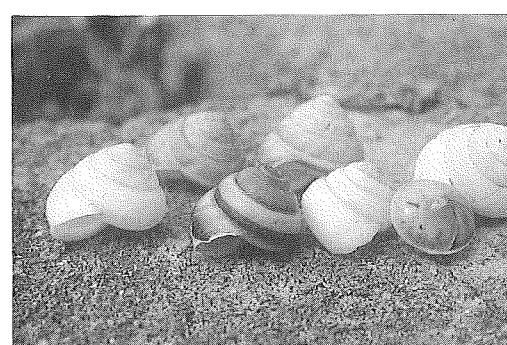
⑥ イトマンケマイマイ



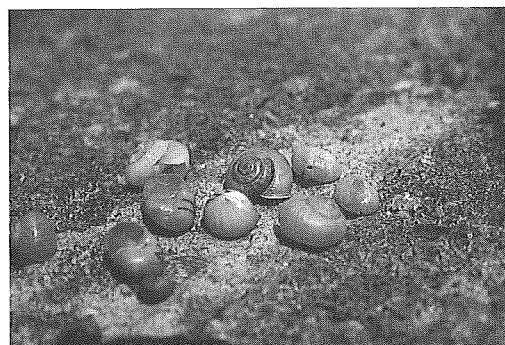
③ イエジママイマイ



⑦ パンダナマイマイ



④ オキナワヤマタカマイマイ



⑧ オキナワスカワマイマイ

古宇利島のクモ類について

千木良 芳範

(沖縄県立博物館)

Spiders from Kouri Island, the Okinawa Islands

Yoshinori CHIGIRA

(Okinawa Prefectural Museum)

I、はじめに

古宇利島の動物に関する報告は、極めて少ない。わずかに両生爬虫類に関する、高良（1962）と当山（1981）の報告があるだけである。真正クモ類についての報告は、筆者の知る限りまだない。

ある地域の自然について理解しようとすると、有効な足がかりのひとつは、その地域の生物相を知ることである。すなわち、どんな動物が生んでいるのか、ということである。このような観点から、沖縄のクモ類相についての報告を探してみると以外と少ない。沖縄諸島のクモ類相についてみてみると、下謝名（1963、1967、1970、1971）、コザ高等学校生物クラブ（1969）、大井（1963）らや、最近の千木良（1978、1988、1990）の報告によって、次第に明らかになりつつある。しかしこれらの報告の大部分は沖縄島における調査であり、沖縄島の周辺諸島における調査は、下謝名（1971）と千木良（1978、1988、1990）だけである。

一般に小さな島におけるファウナは単純である。そのため、環境要因との関係を比較解析するには都合がよい。特に主島の周辺に散らばる属島のファウナを、主島と比較解析することによって、それぞれの種の分散力や適応力を類推することができる。その意味で、規模の小さな島における調査は重要なものとなる。このようしたことから、筆者は沖縄諸島のクモ類相の調査を継続している。今回は、1990年度の沖縄県立博物館総合調査の一環として、今帰仁村古宇利島調査の機会を得たのでここに報告する。

II、調査地の概要

古宇利島は本部半島の北、約1.5kmの海上に位置する円形の平たい島である（図1）。島の面積は約2.95km²、周囲はおよそ7.88kmで最高標高地点は107.4mである。島の地質は単純で、中央部に古生代の与那嶺層がわずかに分布し、これを取り囲むように新生代の琉球石灰岩が分布している。周囲の琉



図1. 古宇利島全景

球石灰岩地域では海岸段丘が発達し、島の断面を描くと見事な階段状になる。

集落は島の南側に形成されているが、島の中央や西側の段丘上にも昔ながらの集落がある。ほとんどの平坦地はサトウキビ畑として利用されており、林は段丘の崖下に残されている（PLATE参照）。集落の東側に小規模の湧泉が1箇所あるが、島内に河川は認められなかった。わずかに農業用のため池が、2～3箇所あるだけである。

III、調査方法

調査は1990年12月22日～23日および1991年1月10日～11日、1月23日～24日の3回、6日間にわたって実施した。種類相については、島内をランダムに歩き回りながら、適当な場所を集中的に探査し、見つけたクモを記録・採集した。また定量的なデータを得るために、島内3箇所の林内でラインセンサスを実施した。センサス距離は50m、センサスラインの左右2m、高さ3mの範囲にいるクモを可能な限り見つけだし、クモの種名、占座位置の高さ、網の直径など

を記録した。それぞれのセンサス地点は、地図上から任意に選択した。島内における探査地点、センサス地点を図3に示し、以下に各センサス地点の概略を記す。

St. 1は島の北側に設定した。段丘崖下の林が道路に接近して伸びており、センサスは崖と平行するようにラインを引いた。センサス位置の標高は約55mである。被度は約75%で林内は明るく、風通しも良い。樹高は8m程で、胸高直径も数cmから10cm程のものが多い。ヤブニッケイ、モクタチバナ、フカノキなどが主体となった林である。低木層にクロツグ、ナガミボチョウジ、ヤブニッケイなど、草本層にはクワズイモ、ツワブキ、ムサシアブミなどが見られる。林床のあちこちに石灰岩の突出したもののがみられ、落ち葉がかなり堆積しているが、土壌の堆積は薄い。

St. 2は島の西側に位置している。標高は65mで、St. 1と同じレベルにある段丘崖下の林である。St. 1に比べると階層構造も明瞭で、林の発達状況はよい。被度は約75%、林内は明るく風通しも良い（図2）。高木層は10～12mの高さがあり、アカメガ



図2. St. 2 の林内の景観

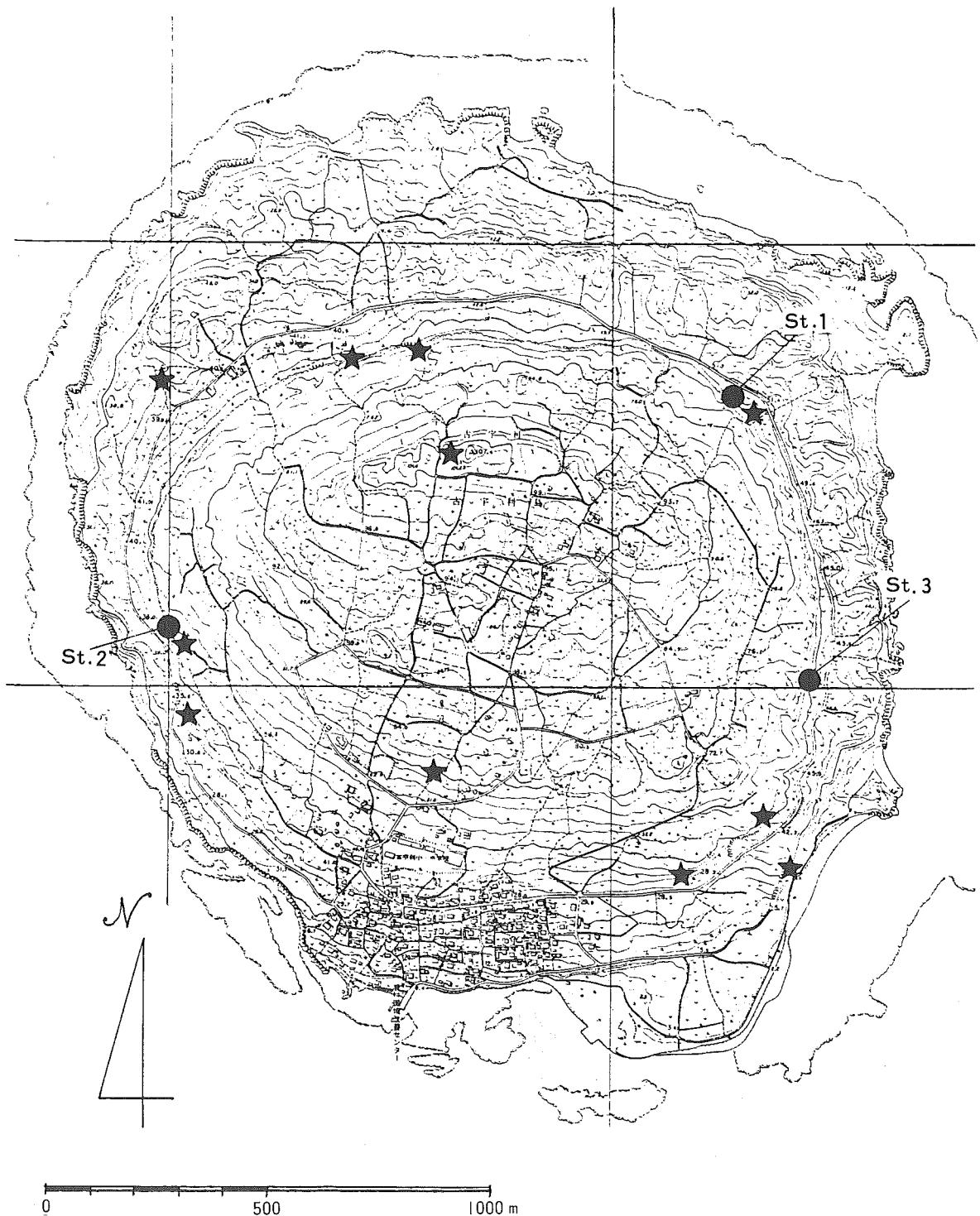


図3. 古宇利島におけるラインセンサス地点(●印 St.1～St.3)と種類相調査を実施したポイント(★印)。

シワ、フカノキ、センダン、イヌビワ、アダン、ヤブニッケイ、リュウキュウマツなどがある。大半の木の胸高直径は10cm内外であるが、リュウキュウマツやフカノキで胸高直径が20cm程のものがある。低木層としてはアダン、クロツグ、ゲッキツ、ヤブニッケイ、モクタチバナ、ナガミボチョウジなどが見られ、草本層にはクワズイモ、フウトウカズラなどがある。木々にノアサガオなどのツル植物がからみ、林内の景観はさながらジャングル様を呈している。基盤は琉球石灰岩で、あちこちに石灰岩の突出が見られる。林床には、落ち葉がかなり積もっているが、極めて乾燥している。土壌の堆積も少ない。センサスラインは崖と平行して引いた。

St. 3 は島の南東側に設定した。標高約50mの地点で、St. 1 および St. 2 地点と同じレベルの段丘である。センサス地周辺の段丘面は、すべて耕作地となっている。林は崖斜面と崖下の部分だけに残り、幅約10mで崖に沿って成林している。ヤブニッケイ、クロヨナ、ハゼノキ、イヌビワ、ゲッキツ、ナガミボチョウジ、クロツグなど

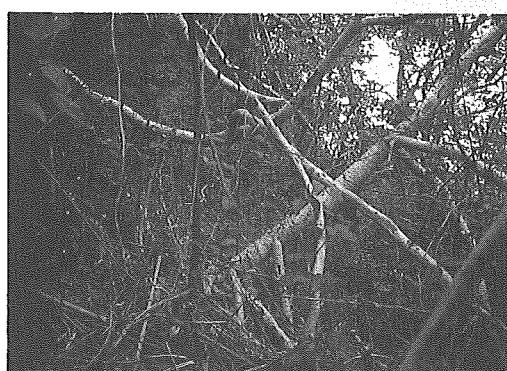


図4. St. 3 の林内の景観

からなる林である。耕作地側には高さ4m、胸高直径1cm程のホテイチクが密生している。林の階層構造は明瞭ではない。ほとんどの木の高さは7m内外であるが、センサスライン沿いには、樹高10m程度の木が数本見られた。被度は約90%とかなり高く、林内は薄暗い（図4）。林の幅がうすく風通しがよいためか、林内は極めて乾燥している。林床には石灰岩が突出しており、土壌層は薄い。林内の落葉、落枝量も3つの調査区の中ではもっとも少なかった。

IV. 結果と考察

古宇利島における3回の調査で、確認された真正クモ類は8科17属24種であった。これらの概況について、以下簡略に記す。なお各種の和名、学名および配列は千国（1989）によった。

キムラグモ科 *Heptathelidae*

1. キムラグモの一種

Heptathela sp.

島内の林内で普通に見つかる。石灰岩の間や岩陰の地面に巣穴を造っている。平坦な地面に上向きのドアをつけているものもあり。海岸近くの段丘面から、最上段まで広く分布している。集落東側の海岸近くの段丘では、巣穴の中に残された卵嚢の残骸も見つけることができた（PLATE参照）。

本種は長い間1種と考えられてきたが、HAUPT（1979, 1983）の指摘以来、分類の見直しが進んでいる。最近も、奄美産

のものがアマミキムラグモとして記載された (ONO and NISHIKAWA, 1989)。沖縄島とその周辺諸島に生息するキムラグモ類も、いくつかの種もしくは亜種に細分されるが、古宇利島のものについてはまだ種名を確定するには至っていない。

トタテグモ科 Ctenizidae

2. オキナワトタテグモ

Latouchia swinhoei POCOCK, 1901

北西側のいちばん高い段丘面にある林の中、集落の東側の海岸近くの段丘面にある林で巣穴を確認した (PLATE参照)。巣が石灰岩の小さな穴を利用して造られているため、掘り出すことができず個体の採集はできなかった。巣内部が糸で裏打ちされていることなどの、巣穴の構造から本種と断定した。

ウズグモ科 Uloboridae

3. マネキグモ

Miagrammopes orientalis BÖS. et STR., 1906
St. 3 のセンサス調査で、1 個体が採集されただけである。沖縄の他の地域での経験では、冬季であっても比較的よく見つかるクモである。

ヒメグモ科 Theridiidae

4. シロカネイソウロウグモ

Argyrodes bonadea (KARSCH, 1881)

島内で普通に見られる。ジョロウグモやチブサトゲグモの網に、アカイソウロウグモと一緒にについていることが多い。林内センサスでは、背丈の低い木の枝先に糸を張り、単独でぶら下がっているのも多くみられた。

5. アカイソウロウグモ

Argyrodes miniaceus (DOLESCHALL, 1867)

島内で普通にみられた。今回見た限りでは、ジョロウグモの網についているのが多かった。

コガネグモ科 Araneidae

6. コゲチャオニグモ

Araneus punctigera (DOLESCHALL, 1857)

部落内の夜間調査で、1 個体を採集。

7. オニグモの一種 *Araneus* sp.

部落内での夜間調査で採集された。目撃個体数は多くなかった。コゲチャオニグモとは別種であるが、採集個体が幼体と亜成体のため種名を特定するにはいたっていない。

8. ヤマシロオニグモ

Neoscona scylla (KARSCH, 1879)

センサス調査中に1 個体が見つかったが、それ以外では見られなかった。

9. ホシスジオニグモ

Neoscona theisi (WALCKENAER, 1841)

部落内や路傍に生えている植物の、葉間に網を張っている個体を採集した。島内では普通に見つけることができた。

10. ナガマルコガネグモ

Argiope aemula (WALCKENAER, 1873)

部落内の畑地、放棄畑、路傍の草原などで普通に見つかる。

11. ジョロウグモ

Nephila clavata L.KOCH, 1878

部落内や林縁部分で採集。島内では普通にみることができた (PLATE参照)。雌の腹部は赤く色づき、成熟していた。

12. オオジョロウグモ

Nephila maculata (FABRICIUS, 1793)

部落内で1個体を採集。目撃個体数が少ないのは季節のせいであろう(PLATE参照)。

13. チブサトゲグモ

Gasteracantha mammosa C.KOCH, 1845

部落内で普通に見かける。冬季のせいか、幼生や亜成体が多く目撃された。

14. シマゴミグモ

Cyclosa insulana (COSTA, 1834)

段丘崖の林内や、農道沿いの雑木林の薄暗いところで普通にみられた(PLATE参照)。

15. トゲゴミグモ

Cyclosa mulmeinensis (THORELL, 1887)

島内で普通に見つかる。特に部落内の生け垣や、庭木などに網を張っていることが多い。また路傍に生えている植物を利用して、網を張っているのをよく見かけた。チブサトゲグモと混在していることも珍しくなかった。

16. ギンメッキゴミグモ

Cyclosa argenteoalba BÖS et STR., 1906

集落内や路傍では見かけなかったが、林内センサスでは普通に見かけた。林内では目撃個体数も多く、ラインセンサス調査ではもっと多く出現した。特に島の東側に設定したSt. 3では、多種を圧倒して出現した。

17. ギンナガゴミグモ

Cyclosa ginnaga YAGINUMA, 1959

St. 3 のセンサス調査で1個体の亜成体を採集した。他のゴミグモ類と違って、目撃された個体数は著しく少ない。

17. ヤマゴミグモ

Cyclosa monticola BÖS et STR., 1906

段丘崖下の林内で普通にみられる。ギンナガゴミグモ同様、他のゴミグモ類に比べると目撃個体数は多くはなかった。

18. コガネグモダマシ

Larinia argiopiformis BÖS et STR., 1906

部落内や農道のススキなどの葉に網を張っている。夜行性のクモであるので、夜間調査でのみ目撃・採集された。目撃個体数は多かった。

19. ハラビロスズミグモ

Cyrtophora unicolor (DOLESCHALL, 1857)

St. 1 のセンサス地で、網と卵嚢を確認した。網のもち主はすでに死んだらしく、網にはいなかった。

アシナガグモ科 *Tetragnathidae*

20. チュウガタシロカネグモ

Leucauge blanda (L.KOCH, 1878)

島の東側の路傍で、網を張っている亜成体を採集した。St. 2 のセンサスで、シロカネグモの一種（幼体）が4個体採集されているが、おそらく本種であろう。

アシダカグモ科 *Heteropodidae*

21. コアシダカグモ

Heteropoda forcipata (KARSCH, 1881)

St. 2 付近の路傍において、夜間観察の際にツワブキの葉の上にいるのを採集。

22. カマスグモ

Thelecticopis severa (L.KOCH, 1875)

St. 2 付近の林で夜間観察を実施した際に、ヤブニッケイの枝を揺すったら落ちてきた。葉に止まっていたのであろう。

カニグモ科 Thomisidae

23. ワカバグモ

Oxytate striatipes L.KOCH, 1878

部落内の夜間調査で1個体を採集。

24. ハナグモ

Misumenops tricuspidatus

(FABRICIUS, 1775)

部落内の夜間調査で、石垣に生えているススキにとまっているのを採集。

以上、古宇利島で確認されたクモ類について概略を示した。これだけの資料で、古宇利島のクモ類について論議するには、十分とはいえない。しかしながら、ある程度の概略をつかむことはできそうである。以下に若干の所見を述べ、考察にかえたい。

今回確認されたクモ類のうち、18種は造網性のクモで、残りは徘徊性のクモが4種、地中性のクモが2種であった。昼間の歩きながらの調査であったので、どうしても目撃の対象が造網性のクモに片寄ってしまったことは否めない。また今回の調査では、落ち葉の下やリッター内のクモの採集努力はほとんど無きに等しい。今後この分野のクモ類が加わると、古宇利島の真正クモ類相はもっと増えるだろう。

今回の調査で、特に目についたクモはチブサトゲグモとトゲゴミグモ、コガネグモダマシの3種であった。集落内の庭木には、必ずといっていいほどこの3種が網を張っていた。島全域の定量調査を実施したわけではないが、この時期の古宇利島における造網性クモ類の優占種はこれらの種になる

であろう。このうちチブサトゲグモとトゲゴミグモは、沖縄の他の地域でも普通にみられ、日向な場所を好み、比較的きびしい環境のもとでも生活することができる。そのため沖縄島のような大きな島でも、海岸林内や海岸の岩場に生えるわずかな植物の枝間にも網を張っているのをみる。今回古宇利島でみられたチブサトゲグモは、ほとんどが亜成体であった。本部半島では冬季であっても成体が見られるし、出現の季節的変動も明瞭ではない。古宇利島のような小さい島では、環境の厳しいため季節的な消長が現れるのかもしれない。

一方、コガネグモダマシは夜行性のクモであるので、昼間だけの調査ではほとんど気がつかない。夜間に部落内や農道を歩くと、普通に見つけることができる。目撃の頻度から推察すると、個体数はかなり多いようである。

古宇利島で確認された種は、すべて沖縄島との共通種であった。バルーニング（気流に乗って空を飛んで離れた場所にいく）という独特の分布法を持つクモ類にとって、沖縄島と古宇利島程度の距離は問題とはなり得ないのであろう。そのため本部半島で普通に見かける種が、古宇利島でも確認されている。しかしキムラグモの一種については、特筆する価値があるかもしれない。キムラグモの一種は地中生活をする徘徊性のクモで、他のクモ類のように空を飛んで分布を広げることはしない。そのため海峡の存在は、キムラグモの一種の分布にとっては大きな意味を持つ。それはまた、古宇

利島の地史を解明するうえでの貴重な材料のひとつとなる。

古宇利島の周囲に発達する海岸段丘は、古宇利島が過去に何回かの隆起を経て、現在にいたっていることを示している。与那嶺層は本部半島に広く分布する地層で、主に非石灰岩からなる。おそらくは沖縄島から古宇利島が離れた際に、キムラグモの一種（あるいはその祖先）は与那嶺層の分布する地域に生き残ったのであろう。その後古宇利島が隆起を繰り返す度に島の低い地域へも分布を広げ、現在では島の高い場所から海岸近くまで分布しているのであろう。古宇利島の段丘形成の年代が推定されれば、それにともなうキムラグモの一種の分散の速度も推測されるかも知れない。

島の3箇所で実施したラインセンサスでは、8種のクモが確認された（未同定、不

表1. ラインセンサスで確認された造網性のクモ類

| 種名 | St.1 | St.2 | St.3 | 合計 |
|-------------------------|-------|-------|-------|-------|
| マネキグモ | | 1 | 1 | |
| シロカネイソウロウグモ | 6 | 1 | 7 | |
| オニグモ SP(*1) | 1 | | 1 | |
| ヤマシロオニグモ | 1 | | 1 | |
| シマゴミグモ | 9 | 6 | 3 | 18 |
| ギンメッキゴミグモ | 8 | 10 | 28 | 46 |
| ヤマゴミグモ | | 1 | 1 | |
| ハラビロスズミグモ | 1 | | 1 | |
| ギンナガゴミグモ | | 1 | 1 | |
| ゴミグモ SP(*2) | 5 | 1 | 6 | |
| シロカネグモ SP(*3) | 4 | | 4 | |
| 不明種 | 2 | 4 | 6 | |
| ----- | ----- | ----- | ----- | ----- |
| 総合計 | 21 | 36 | 36 | 93 |
| ----- | ----- | ----- | ----- | ----- |
| 密度(／100m ²) | 10.5 | 18.0 | 18.0 | 16.0 |

*1) ヤマシロオニグモとは別種。

*2) 表中のゴミグモ類のいずれかの種。

*3) おそらくチュウガタシロカネグモ。

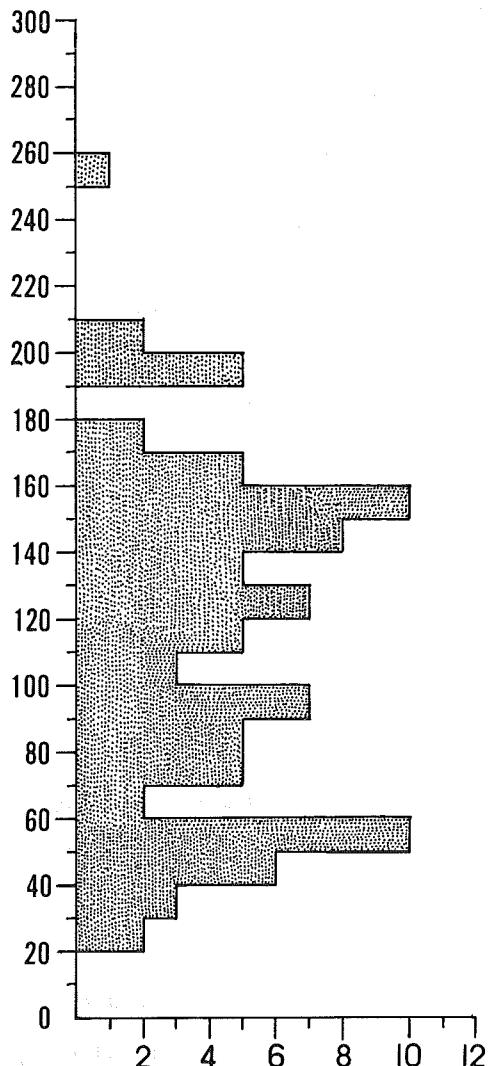


図5. 古宇利島における造網性のクモ類の垂直分布。

明種を除く）。それぞれのセンサス地点で、確認された種と目撃個体数を表1に示す。冬季であったためか、各センサス地点で確認された種数は少ない。目撃個体数も、St.1では21個体、St.2とSt.3ではそれぞれ36個体であった。確認された個体数は少なく、幼生や亜成体が多いのが特徴である。この傾向は瀬底島でも認められている（千木良, 1988）。

表1には各センサス地での100m²当たりの密度も示してある。3箇所の調査地点のトータルの密度は、16.0/100m²であった。

ラインセンサスで記録されたクモの、垂直分布をひとつにまとめたのが図5である。これからみると、古宇利島の林内におけるクモの分布は、高さ50~60cmと150~160cmのところにピークがあるようだ。高さ3mまでを調査したが、ほとんどのクモは2m以内の高さにいた。これらの傾向は瀬底島におけるクモ類の垂直分布とよく似ている(千木良, 1988)が、瀬底島に比べると古宇利島の方が占座位置はやや高かった。

V、引用文献

- 千木良芳範, 1978. 屋嘉比島と久場島(沖縄諸島)の真正クモ類. 沖縄県天然記念物調査シリーズ第12集, 171-176.
- 千木良芳範, 1988. 冬季の瀬底島における造網性のクモ類について. 沖縄県立博物館総合調査報告書(V)-瀬底島-, 23-32.
- 千木良芳範, 1990. 浜比嘉島の造網性のクモ類について. 沖縄県立博物館総合調査報告書(VII)-浜比嘉島-, 33-42.
- 千国安之輔, 1989. 日本クモ類大図鑑. 308pp. 東京, 偕成社.
- HAUPT, J., 1979. Lebensweise und Sexualverhalten der mesothelen Spinne Heptathela nishihirai n. sp. (Araneae, Liphistiidae). ZOOL. ANZ., 202, 348-374.
- HAUPT, J., 1983. Vergleichende Morpho-

logie der Genitalorgane und Phylogenie der Liphistiomorphen Webspinnen (Araneae: Mesothelae) I. Revision der bisher bekannten Arten. Z. ZOOL. SYST. EVOLUTFORSCH., 21, 275-293.

コザ高等学校生物クラブ, 1969. Forschung No.1

大井良次, 1963. 沖縄本島・西表島のクモ. ATYPUS No.29, 15-17.

ONO, H. and Y. NISHIKAWA, 1989. Taxonomic Revision of the Heptathelid Spider (Araneae, Mesothelae) from Amami-oshima Island, the Ryukyus. MEM. NATN. SCI. MUS., TOKYO, (22), 119-125.

下謝名松栄, 1963. 沖縄本島の蜘蛛(I) ATYPUS No.28, 22-34.

下謝名松栄, 1967. 琉球列島のクモ相について. 沖縄生物学会誌 4(6), 16-25.

下謝名松栄, 1970. 動物の地理分布をどう指導したらよいか. 沖縄生物教育研究会誌 4, 38-68.

下謝名松栄, 1971. 奄美大島・久米島及び宮古島の真正クモ類. ATYPUS 57, 19-31.

高良鉄夫, 1962. 琉球列島における陸生蛇類の研究. 琉球大学農家政工学部学術報告, (9), 1-202.

当山昌直, 1981. 沖縄群島の両生爬虫類相(I). 沖縄県立博物館紀要(7), 1-8.

PLATE



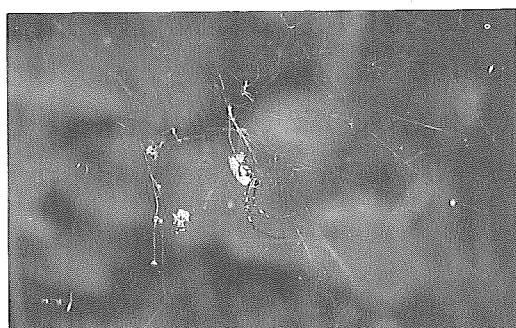
段丘崖に成林する林



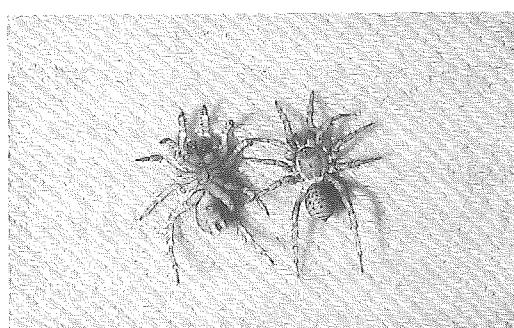
オキナワトタテグモの巣穴



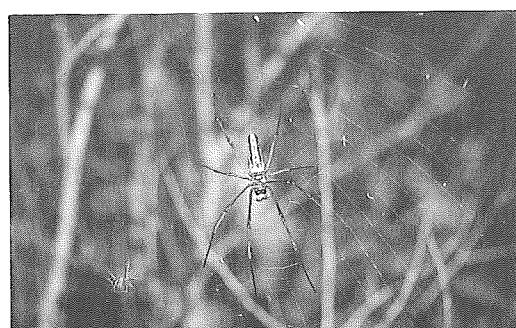
集落内の屋敷を囲う樹木



ジョロウグモ



古宇利島のキムラグモ（標本）



オオジョロウグモ



キムラグモ卵嚢の残骸



林内のシマゴミグモ

古宇利島の祭場と儀礼

大 城 學

(沖縄県立博物館)

Religious Service Sites and Ceremonies of Kouri Island

Manabu OSHIRO

(Okinawa Prefectural Museum)

はじめに

古宇利島に、次のような説話が伝承されている。〔註－1〕

むかしむかし古宇利島（運天港の入り口にある小さな島）に男の子と女の子が現れた。二人は裸体でゐたが、まだこれを愧づるといふ気は起らなかつた。そして毎日天から落ちて来る餅を食つて、無邪気に暮らしてゐたが、餅の食ひ残しを貯へるといふ分別が出るや否や、餅の供給が止まつたのである。そこで二人の驚きは一通りでなく、天を仰いで、

たうたうまへされ、たうたうまへ

（お月様、もしお月様）

大餅やと餅お賜べめしようれ

（大きい餅を、太い餅を下さいまし）

うまぐる拾うて、おしやげやべら

（赤螺を拾うて上げませう）

と歌つたが、その甲斐も無かつた。彼等はこれから労働の苦を嘗めなければならなかつた。そして朝な夕な磯打際にウマ

グルなどをあさつて、玉の緒を繋いでゐたが、或時海馬の交尾するのを見て、男女交媾の道を知つた。二人は漸く裸体の愧づべきを悟り、クバの葉で陰部を隠すやうになつた。今日の沖縄三十六島の住民はこの二人の子孫であるとのことだ。

この説話は、旧暦7月に行われる祭祀＜ウンジャミ＞で、男女1組の神役がフンシヤーという根家の1番座敷で共寝のしぐさを演じたという、かつて行われていた儀礼とも関わりがあるといわれている。また、この説話に起因してか、古宇利島の拝所に祈願に訪れる人が多いという。

このように、古宇利島には説話を中心とする口頭伝承をはじめ、衣・食・住・生産・生業、交易、社会生活、信仰、民俗知識、民俗芸能、人生儀礼、年中行事等さまざまな有形無形の民俗事象があるが、そのなかから、本稿では、①祭場（＝拝所）、②神職組織、③年中行事（＝儀礼。祭祀）をとりあげる。

なお、古宇利島は、南の港近くに形成さ

れている本集落と、島の中央部のウイバル（上原）、北側のシチャバル（下原）という明治期以降に形成された集落から成る。本稿では、本集落の民俗事象を扱うこととする。

古宇利島での調査は、古宇利春雄氏（1927年7月5日生）と、菊池園子氏（民宿くしらさく經營）にお世話になった。古宇利さん宅はムラの草分けの家（根家）で、屋号をフンシヤーといい、春雄氏は神人で、フンシ神である。春雄氏から御嶽や年中行事等について聞き取りをし、菊池氏には御嶽の所在確認にのために車で同行してもらった。厚く感謝申しあげる次第である。

I. 祭 場

古宇利島のことは、『琉球国由来記』卷十五（1713年）には今帰仁間切「郡村」と表記されていて、御嶽は次の3つを紹介している。

中 嶽

神名、ナカモリノ御イベ

三八月、四度御物参、有祈願也。

サウ嶽御イベ

（神名不伝）

カマニシ嶽御イベ

（神名不伝）

現在、古宇利島における御嶽の数はくナナタキと称しているように、次の7つの御嶽が信仰の対象となっている。御嶽の現況をみてみよう。

1. ナカムイ

港近くにある農村環境改善センターの北西側にある小高い所に位置する。御嶽とその周辺は古宇利原C遺跡である。御嶽の周りにはマーニ（クロツグ）やガジュマル等が生えている。入り口にコンクリート製の階段がある。嶽域内にコンクリート製の祠があり、その中に石が3個置かれている。祠の後方に岩がある。

2. マーハグチ

古宇利集落の北東側に位置する。農道から山の方に向かって参道がある。50m程行くと大きな石灰岩があって、岩の少し窪んだあたりに、直径15~20cm位の石が数個置かれている。そこがイベで、祈願のあとがある。周りはススキや木が生い茂っているが、イベの前は2m四方にわたって草が生えていない。この御嶽の一帯は、ウガミヌシチャという原名である。

この御嶽は、7つの御嶽で最高位にランクづけされている。古宇利島は天降りした3人の親子が造った島で、この御嶽には、3人の骨をまつてあると語り伝えられている。

3. トゥンガヌウガミ

古宇利集落の東側、マーハグチの南東側に位置する。木が生い茂っていて中に入れず、イベを確認することができなかった。現在、年中行事にこの御嶽のイベで祈願することはないという。

4. ソーヌウタキ（御嶽）

島の東側、海岸沿い（岬）の岩の下にあるというが、イベを確認することができな

かった。御嶽の一帯は、ソーヌパナと称する。現在、年中行事にこの御嶽のイベで祈願することはないという。

5. プトウキヌメー

島の北方、下原集落の東側に位置する。この御嶽の一帯はプトウキヌウイバルと称する。一周道路沿いにあって、道路脇からコンクリート製の階段を十数段登りきったところに大きな岩があり、そこが御嶽である。入り口はススキが生い茂っている。全体は洞窟の形状をしており、イベには石筍と石筍の間にシャコ貝の香炉がある。

6. ビジヌメー

古宇利集落の北西側、一周道路沿いにある。道路脇から細い道を山の方に向かって30m程行ったところに、長さ2m、高さ90cm位の大きな石灰岩がある。そこがイベで、岩の前に10~15cm位の石が数個あり、祈願のあとが残っていた。岩の周囲はクワズイモやホシダが生い茂っている。

7. マチジヌウイ

古宇利小・中学校の後方、マーハグチの北側にある。木が生い茂っていて中に入れず、イベは確認することができなかった。現在、年中行事にこの御嶽のイベで祈願することはないという。

以上が古宇利島の七嶽（7つの御嶽）である。一方、御嶽ではないが、祭場として次のものがある。

①神アシャギ

ナカムイの北側、フンシヤーの東隣りにある。4本柱で、屋根ともにコンクリ

ート製。アシャギの中もコンクリートを敷きつめてある。神アシャギ前庭はアシヤギナーといい、その南端に舞台がつくられている。

②クワッサヤー

ナカムイの後方、海岸沿いにある拝所で、通称＜お宮＞。鳥居があり、それをくぐるとコンクリート製の祠がある。中に3つ石がある。拝所はブロック塀で囲まれている。

③シラサ

クワッサヤーの前に突き出た岩場をいう。7月のウンジャミや12月のムユーウイミのときに、神送りの祭場として使用する。

④ウミシル神

フンシヤー（古宇利春雄さん宅）の庭にある。コンクリート製の祠の中に3つ石がある。旧暦1日と15日に、フンシ神が拝む。ウンジャミのとき、祠に縄を掛け舟漕ぎ儀礼を行う。

II. 神職組織

神職者は＜カミンチュ。神人＞と呼ばれている。後継者不足で、現在、カミンチュは全員そろっていない。名称と員数は次のとおりである。

ヌールと撻神は代だい家系で継承していない。継承は、そのときに＜神＞の靈魂がのりうつった女性が後継者となるという。フンシ神は、代だい古宇利家（屋号：フンシヤー）が継承している。

1. ヌール（ノロ）

1人。現在のヌールは、玉城タルさんである。かつてヌールには土地（ヌール地）が与えられたが、現在、そのような制度はない。管轄する御嶽はマーハグチ、トゥンガヌウイ、ソース御嶽、プトウキヌメーである。

ヌールに選ばれた人は、旧暦6月24日に行われるハミサガイで、就任式とお祝いをする。

2. ウッチガミ（撻神）

1人。御嶽はビジムメーを管轄する。

3. ポーシー神

2人。ユー神、イリガサ神ともいう。現在、この神役はいない。そのために、旧暦7月のウンジャミのとき、フンシャーの1番座敷で共寝の仕草を演じるという重要な儀式を行うことができない。

4. ミチチマーイ神

3人で構成。サンムナーともいう。御嶽はマチジヌウイを管轄する。現在、この神人はいない。そのために、旧暦1月15日、5月15日、9月15日にマーハグチ御嶽で行っていた行事・マーハグチヌウグワンが行えない状況にある。

5. サーザーウエー神

クニマーイ神ともいう。9人で構成されている。

以上は女性の神職者であるが、男性神職者には、次の2者がいる。

①ウミシル神

玉城家（屋号：マーグスヤー）の家長があたる。

②フンシ神

古宇利家（屋号：フンシャー）の家長があたる。御嶽はナカムイを管轄する。また、フンシャーの庭にあるウミシル神の祠も管轄する。

III. 年中行事

はじめに、『琉球国由来記』卷十五（1713年）に記載されている古宇利島関係の祭祀をみてみよう。

郡巫火神

麦稻四祭、併年浴・大折目・柴指・芋折目、三日崇時、仙香、五水壺沸六合（一祭ニ貳合完。百姓中）

山留ニ竹木伐故、為作物、崇祈之時、仙香、五水四合（上同）供之。

郡巫、祭祀也。

神アシアゲ

麦稻穗之時、芋神酒ニ完、肴十四器完（オエカ人・百姓）

同大祭之時、蕃薯神酒ニ完、肴拾四器完、赤飯ニ器（オエカ人・百姓）麦四丸キ、粟四結（上同。巫・撻神へ遣也）年浴之時、蕃薯神酒ニ、肴十四器、赤飯ニ器（上同）

大折目之時、蕃薯神酒ニ、肴・赤飯（上同）コバ餅七十三本、魚七十五（上同。巫・撻神へ遣也）

柴指・芋ナイ折目之時、蕃薯神酒四完、肴廿八器完（上同）供之。

郡巫、祭祀也。

毎年七月、大折目トテ、海神祭、且作毛之為ニ、巫・大根神・居神、都合貳拾人余、城内、ヨウオスイト云所ニ、タモトヲ居ヘ、花・五水（両惣地頭ヨリ出ル）祭祀シテ、アワシ川ノ水トリ、巫・大根神、浴テ、七度アザナ廻リイタシ、於庭酒祭ル也。（自按司出ル）ソレヨリ縄ヲ引張、船漕真似ヲ仕リ、城門外ヨリ、惣様馬ニ乗、弓箭ヲ持、ナカレ庭ト云所ニ参リ、塩撫、親川ニイタリテ水撫デ、又城内、ヨウオスイニテ、祭祀也。

さて、現在行われている集落レベルの年中行事を中心には、その概要を記してみる。これらのなかで、今年度、実際に見学したのは＜ウンジャミ＞だけである。なお、概要に紹介した月日はすべて旧暦である。行事に使う供物の米や線香は字から支給される。字の予算で＜ウグワン費（行事費）＞が計上されている。

1. 正月。チータチ。

1月1日。各家の若者が、早朝、集落の東側にある井戸（アガリハー）から水（若水）を汲んでくる。若水でお湯を沸かし、仏壇にお茶を供える（ウチャトー）。また、若水で家族が洗面する。そのとき、東方に向かって、「くわぬちゃーや みふどうわしみそーち／うやぬちゃーや わかげーらちきみそーれ」（子どもたちは、成長させてください。大人たちは、若返えさせてください）と唱えたという。

朝7時ごろに、アサウグワン（朝御願）

が行われる。神人（カミンチュ）、区長、有志たちが酒と線香（ヒラウコー）を持って、クワッサヤー（お宮）とアガリハー（東の井戸）に詣である。1年間の健康祈願をする。

2. ハチウクシ

1月2日。仕事始めの行事。舟主は舟靈（フナダマ）をまつり、航海安全と大漁祈願をする。神人と区長は、お宮で豊作と大漁祈願をする。

3. ウマチー

2月13・14・15日。麦の収穫際。

13日と14日の深夜1時ごろ、フンシヤー（古宇利家）の家長が、ナカムイに向かって麦の豊作感謝とムラ人の健康祈願をする。フンシヤーの家長は神衣裳を着けて杖をついて、13日はナカムイの杜の西側から、14日は杜の東側からナカムイに向かって祈願をする。祈願をするときは、ムラ人はフンシガミに会ってはいけない。この両日、フンシヤーでは、フンシ神の古宇利春雄氏ひとりだけで寝る。他の家族の者は与所の家で寝る。

15日の朝、ヌール、撻神、ミチチマーイガミが集落の東側の畑（ハーバル）から麦の穂を3本とってくる。麦の穂をナカムイに献饌して、神人は豊作祈願をする。その後、神アシャギの前にカマドを設置し、鍋にアガリハー（井戸）から汲んできた水を入れて沸騰させ、その中に麦の穂を入れてたぎらかす。そのたぎり具合で、この年、台風が何回、どこから来るのかを占う。その後、麦を皿に並べて、神人たちが神アシャ

ギの中から東の方に向かって豊作の感謝と祈願を行う。

なお、神人がハーバルの畑から麦の穂をとってくる往復路で、ムラ人は神人に出会わないようとする。出会ったムラ人は、酒を持参し、ナカムイで詫びをしなければならない。もし、詫びをしなければハブに咬まれるという伝承がある。

4. ムシアシビ

4月中旬～下旬。害虫駆除の行事。各字（東・西・中・上原・下原）が畑からとってきた害虫を、芭蕉の葉柄で作った舟に乗せる。舟は1艘だけつくる。東の浜（ハンチビ）で、神人が酒、餅、豆腐、豚肉を供えて祈願をしてから舟を海に流す。潮がひくときに害虫を流す。そのとき、「ユスジマンカイ ナガリティイキヨー（余所の島に流れて行け）」と唱える。かつてはその後に相撲大会が行われていたようだ。

5. プーチヌウグワン

4月中旬～下旬。プーチゲーシともいう。プーチは流行病の意。流行病や災厄を祓い、健康祈願をする行事である。かつては、左絹いになった縄に豚の骨を結わえ、2本の竹につるして、島の入り口である浜（チグチといい、5か所ある）に立てて、神人たちが流行病や災厄祓いと、ムラ人の健康祈願をした。現在、行事は簡略化され、縄は用意しない。神人と区長がチグチで祈願をするだけである。この行事は9月にも行われる。

6. タキヌウグワン

4月下旬。ムラの弥栄を祈願する行事で

ある。神人と区長が、ナナタキ（7つの御嶽）を廻って、酒、米、線香を供えて祈願する。イベまで行けない御嶽は、ウトゥーシ（遙拝所）で祈願をする。廻る順序は①トゥンガヌウガミ、②マーハグチ、③ソーヌ御嶽、④プトゥキヌメー、⑤ビジヌメー、⑥マチジヌウイ、⑦ナカムイである。

9月下旬にも、この行事を行う。

7. ウマチー

5月13・14・15日。栗の収穫祭。13日と14日の深夜に行われるフンシ神の祈願、15日の祭儀の仕方は、(3) ウマチー（2月13・14・15日）と同様である。15日の朝、ヌール、撻神、ミチチマーイガミが集落の東側の畑（ハーバル）から栗の穂を3本とってくる。栗の穂をナカムイに献饌して、神人は豊作祈願をする。

8. シンチャイ・ヌバガタイ

6月23日。神人の就任祝いに関わる行事である。シンチャイ・ヌバガタイとは、退いてまた出るという意。新しい神人が誕生するときは、門中でお重を用意してヌール家で神人誕生の報告をする。新しい神人が誕生しない年は、アサウグワン（朝御願）をヌール家で行う。

9. ハミサガイ

6月24日。神人の就任祝い。エージュービエーといって、新しく神人の仲間に加えてもらう意味のことばがある。そのときは、新しい神人の方からお重を用意してくる。

神人の後継者が決まったときには、夜、ヌールの家で就任祝いをし、その後、神アシャギの庭で女性だけの踊りがある。

その晩、ユーニガイ（世願い）を行う。各家から御飯をもらい、ヌールの家でお供えして祈願をする。祈願後、区事務所前行き、そこに吊るしてある蛸をとり、御飯といっしょに食べる。

10. サーザーウェー

6月25日・26日。祓い清める行事である。サーザーウェーガミ（クニマードガミ）といつて男女9人で構成する神人が、男は扇子を持ち、女はクバ扇を持ってムラの拝所や招待のあった家いえを廻って踊りをする。特に、新築した家はサーザーウェーガミを招待し、家を清めてカリ（嘉例。縁起のよいこと）をつけてもらう。踊りは円陣をつくり、鼓を打ち鳴らしながらおどる。

25日は、神アシャギ、ウンナヤー、撻神家で踊ってから、招待のあった家いえを廻り、最後にファンシヤーで踊る。26日は区事務所、ヌール家で踊ってから、招待のあった家いえを廻り、最後にお宮で踊る。両日とも午後4時ごろからはじまる。サーザーウェーでうたう神歌の歌詞を紹介しよう。

[踊りの歌]

①わーやーに むしるしきへーてい

サーザーウェーヌ ワースシージ
ツヤーツヤー（囃子、以下※印）

②うがみばーる ふくゆんビー ※

③みひさんまんちる うがむんどー ※

④うんなじむや すいたーびょん ※

⑤ななわかしや ふたわかし ※

⑥ひさしがまや ちんぱみせん ※

⑦とうばやじまりん ゆじけーみせん※

[道歌。招待のあった家

へ行く道中でうたう歌]

・やまとうんまぬ はいみせんどー
わがぬーるうかみぬ
うまちみせんどー
やまとうふにぬ はいみせんどー

[踊り終えて、家を

出て行くときの歌]

・エー たちな ヨーイ
かみぬちゃー ヨーヘーイ
いすぎいすぎ かみぬちゃー^一
あーわんていーちどう
とうばちょんどー
ヘーイヨーナレーホー

11. ウンジャミ

7月、盆後の初亥の日。豊作や大漁の感謝と祈願を行う。

朝8時ごろから港近くに建てられた農村環境改善サブセンターの側で、男たちがハーリー舟を並べて、舟の点検や手入れをする。ハーリーのとき沖を折り返す目印のブイも準備する。

一方、集落を東・中・西の3つに分けてあるが、各ムラの役員の家では係りの人たちが料理をつくり、昼食をそこでとる。

女の神人（＝神女）たちは、お昼前にヌミ（弓の意）と称する6尺位の棒（檣材が多い）に白紙を5か所に巻き付けてカジエ（飾り）とする。また、ヌミの一端（上部）に唐船を描いた旗（トーシンケージ）をつける。

午後1時半ごろ神アシャギに神人たちが集まる。神女は白の神衣装を着て、頭にはハブイ（方言でピーピーカンジャと称する

蔓でつくった被り物) をしている。持参したヌミは神アシャギの側に置いてある。

膳に盛った米の上に線香(ヒラウコー)を立て、神人や区長、有志たちは神アシャギの中から南の方(ナカムイ)に向かって祈願をする。祈願の内容は、ムラの守護神に過去1年間の豊作、豊漁、ムラ人の健康、ムラの弥栄(これらを世果報という)を感謝し、あわせて向こう1年間の世果報をお願いする。

祈願後、ヌミを持っている神女は神アシャギの外(南側)に出て、神アシャギに向かって立つ。神女たちは横1列に並び、砂で書かれた角形の上をコの字を描きながら歩き出す。それを7往復する。神遊びである。終わると神女に餅が配る。

神女1人が、ヌミの上端部に餅を2個吊るして、ハイ、ハイ、ハイと3回掛け声をかけ、ヌミを上に突き上げる。それをもう1人の神女が自分の持っているヌミで突き落とす。それが終わるとナカムイに向かって手を合わせ、祈願をして神アシャギでの儀礼は終わる。神人たちは、神アシャギの周りで祭儀をみている女性に、餅を分けてあげる。この餅は、男は食べてはいけないといわれている。

神人たちはヌミを持って、神アシャギの西隣にある草分けの家(根家)・フンシヤー(古宇利家)に行く。祭りの日、神人たちはフンシヤーに入り出すときは、東側の門・カミジヨーを使う。祭りの日以外はカミジヨーは閉ざされている。フンシヤーの庭にあるウミシル神の祠に東西に縄を掛け、

その中にヌミを持っている神女が入る。縄は舟を意味し、神女たちはヌミを立てて、両手で握って輪を描くように上部を回す。これは舟漕ぎの儀礼である。このような舟漕ぎ儀礼は、国頭村字比地のウンジャミでも行われている。

舟漕ぎをしている最中に、縄の外にいる男神人(ポーシー神)が、縄の中にいる女ポーシー神の首を抱きしめて連れ出し、フンシヤーの1番座敷にあがって共寝の仕草を演じる。この祭儀は、ジュゴンが交尾するのを見て、はじめて男女の交わりを知ったという、古宇利島の説話に由来しているという。この祭儀は、本部町字伊野波のシニゲイに演じられる「ムックジャ」や同町字辺名地のシニゲイに演じられる「スルガー・アップー」と同じように、交接の様を演じることによって、ものの生殖を暗示し、それが田畠にいたっては農作物の生殖生産、豊かな稔りをうながそうとする呪術—模倣呪術(imitative magic)あるいは類感呪術(homeopathic magic)—である。なお、この祭儀は現在、ポーシー神がないために行っていない。

神人たちはフンシヤーを移動し、海岸端の拝所・クワッサヤーの前方横で、神アシャギの庭でやった祭儀と同じことを行う。ここでは神女たちが、鳥居の外からクワッサヤーに向かって横1列に並んで竹竿を持って、前後に揺する所作を演じる。やはり舟漕ぎの儀礼であろう。

クワッサヤーでの儀礼が終わると、クワッサヤーの前のシラサと称する岩場の上で、

東に向かってヌミを立てて、前後に動かす所作を演じる。神送りの祭儀だという。

これで神女たちの祭儀は終わるが、引き続き港（ウップドゥマイ）で男たちによるハーリーが行われる。かつて、ウガンバーリーには、神人が舟に乗ったという。また、ハーリーの出発は、神人がハーリー舟を押し出すのが合図であったともいわれている。ハーリーは港で東西を往復して漕ぐ。以前は女性が漕いだようである。

東の方向に漕ぐのは、大宜味村字塩屋を意識しているという。これには次のような伝承がある。むかし、世の始まりのころ古宇利島に兄妹がいたが、兄は島に残り、妹は塩屋に渡って住むようになった。このとき兄が妹を送り出したところがウップドゥマイの浜であったという。それ以後、古宇利島を男神、塩屋を女神として、両ムラの弥栄とムラ人の幸せを祈願するためにウンジャミの行事をやっているのだという。なお、この日は、塩屋でもウンジャミが行われている。しかし、古宇利島の年中行事で、塩屋を意識するのはウンジャミのときだけであるというから、東の方向に神送りをしたり、舟を漕ぐことが、塩屋に関わりがあるのかどうかは、今後検討しなければならないであろう。

古宇利島の集落の立地から考えると、東の方に海が開けており、その方向がもしかするとニライ・カナイかも知れない。ニライ・カナイに向かって神送りをしたり、舟漕ぎをするということは、よそのムラでもやっていることである。古宇利島の年中行

事でも、2月のウマチーと5月のウマチーで集落の東の方にある畑（ハーバル）から麦や粟の穂をとってくるし、それらの穂を神アシャギの中から東方に向かって祈願をしている。また、12月のムユーウイミの神送りでも、シラサから東方に向かって神人たちが祈願をしている。以上の事例から、古宇利島の祭祀では、やはり、東方を意識していることがわかる。

12. カミウグワン

8月10日。以前は、門中ごとに黍餅をつくって神人の家に届け、神人たちは神アシャギにその餅を供えて、ムラの弥栄を祈願した。現在は、供物を字の方で用意している。また、以前は、ムラ人がフンシヤーの神棚を挙げ、家族の健康と家内繁昌を祈願していたようだ。

13. プーチヌウグワン

9月中旬～下旬。(5) プーチヌウグワン(4月中旬～下旬)と同じ内容である。4月のプーチヌウグワンに対して、9月のものをくシム(下)ヌプーチヌウグワン>という。

14. タキヌウグワン

9月下旬。ムラの弥栄を祈願する行事である。祭儀の内容は、(6) タキヌウグワン(4月下旬)と同じである。

15. ムユーウイミ

12月20日。ムラの1年間の御願解きをする行事である。ヌール、捷神、フンシ神の3人の神人がクワッサヤーとシラサの2拝所で、酒、米、線香を供えて祈願する。シラサでは東方に向かって祈願する。これは

神送りの祭儀である。

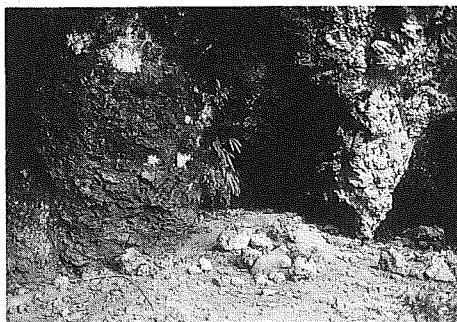
以上、現在行われている古宇利島の集落レベルの年中行事を紹介した。1月15日、5月15日、9月15日の＜マーハグチヌウグワン＞のように、戦後一時期までは行っていたが、神人の後継者がいないために、現在行われていない重要な行事もある。この行事の内容を紹介してみよう。 [註-2]

この日、マーハグチ御嶽の管理者であるミチチマーイ神2人（女性）は、家で（昔は海で）沐浴をして体を清め、屋敷内には塩をまいて悪魔祓いをしてから、満潮時にマーハグチの御嶽に行く。そこで全裸にな

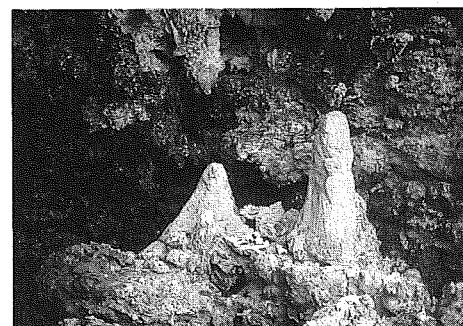
って、御嶽に納められている先祖の骨（この地開闢の男女とその子合わせて3体の骨だといつわれている）を酒（昔は芋御酒）で洗う。この行事の前3日間は血の出るものは良くないものとされ魚肉、豚肉等を食べてはならず、昔は夫婦の営みまで禁止されたとのことである。

[註-1] 伊波普猷「琉球の神話」『古琉球』所収（『伊波普猷全集』第1巻、1974年）

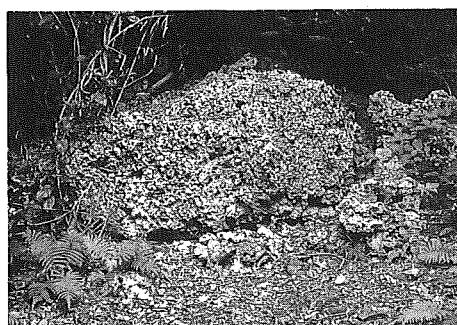
[註-2] 琉球大学民俗研究クラブ「古宇利島調査報告」『沖縄民俗』（第8号、1963年）



マーハグチ（御嶽）



プトウキヌメー（御嶽）



ビジヌメー（御嶽）



ナカムイ（御嶽）



クワッサヤー（お宮）



シラサ



神アシャギ



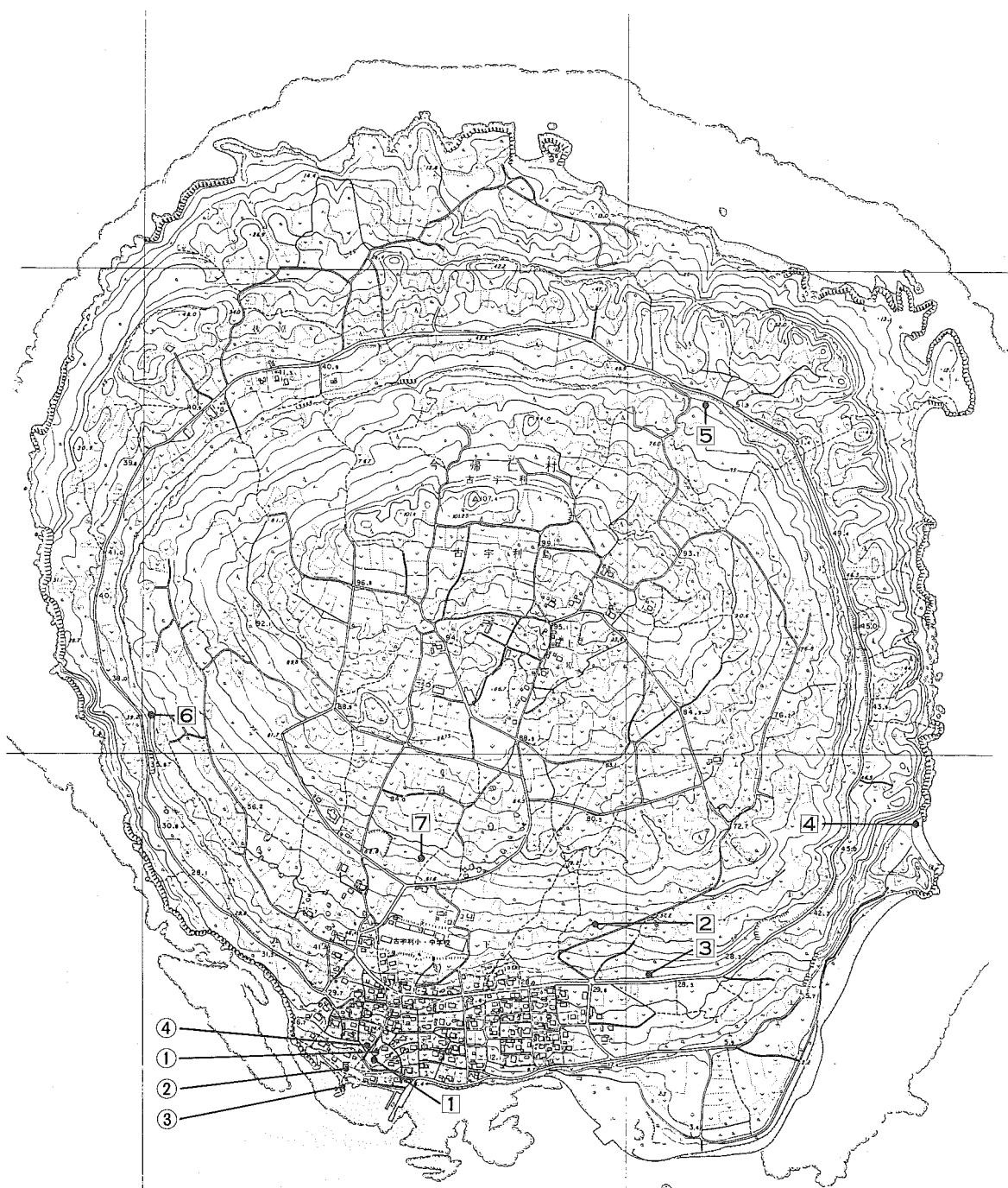
ウルシミ神



ウンジャミとき、神アシャギで、ヌ
ミを持って〈神遊び〉をする神女た
ち。



ウンジャミのとき、フンシャーの庭
で、ウルシミ神の祠に縄をかけて〈
舟漕ぎ儀礼〉を行う神女たち。



①神アシャギ
 ②クワッサヤー(お宮)
 ③シラサ
 ④ウミシル神

①ナカムイ
 ②マーハグチ
 ③トウンガヌウイ
 ④ソーヌウタキ
 ⑤プトウキヌメー
 ⑥ビジヌメー
 ⑦マチジヌウイ

42 古宇利島における祭場の分布

県立博物館総合調査報告書 VII
—古宇利島—

平成 3 年 (1991) 3 月 30 日発行

発行 沖縄県立博物館

那覇市首里大中町 1-1

TEL 098-884-2243

印刷 がじまる印刷